

優秀賞

思春期の感動

愛媛県 済美高等学校一年 杉本 来弥

今の自分からしたら恥じるべき行動で、幼なかつたと思ふ一方、一つの温かい良い思い出になっている。

中学二年生の時、私はこれまでに無い程、毎日がつまらなかつた。親や友達からの注意さえうっとおしかつた。いわゆる「反抗期」だったのだ。外出する時は、態と親と距離を開け、手を繋ぐことなんて、この時の私には以ての外だった。母親とショッピングモールに行った時、「重いから片一方持ってよ。」

と買い物籠の持ち手の片方を私に差し出してきた。親と一緒に買い物籠を持つこと、そして買い物に行っていることもダサイと思っていた私の口からは、有り得ない言葉が飛び出した。

「無理。ダサイ。」

私のその一言は、母親の心をひどく傷つけただろう。母親は車の中でこんな言葉を呟いた。

「ママは何で生きてるんだろかね。」

冷めきつた私の心には何も響かなかつた。むしろ、腹立たしかつた。ある頃から、私の心にはある欲望が湧いて

きた、自由になりたい。そんな小さな欲望は日に大きくなつていった。高額を払って通わせてくれていた塾も辞めたかつた。ある日の塾の帰り、いつものように母親が車で迎えに来てくれた時、その欲望は爆発した。

「塾辞めたい。」

たつたその一言で、たつたその一瞬で母親のいつもの穏やかな表情は豹変し、悔やしさと怒りで顔が歪んだ。恐ろしい程に。

「何で。」

母親の第一声はそれだけだった。しかしその言葉にはきつと沢山の思いが込められていたのだろうと今の私には分かる。もちろん、なぜ塾を辞めたいのかという問い掛け。そんなこと、この言葉の一割程にしかすぎないだろう。なぜ私を裏切るの。なぜ私が頑張っているのだろう。という疑問と悔しさに満ちた表情だった。口論は夜中まで続いた。更に喧嘩は熱を増し、掴み合いになった。そこに父親が帰って来た。息の上がつた私たちをリビングへ集め、落ち着いて話を聞いてくれた。掴み合いになる

までの出来事を全て話した。私はこの時、自分が悪いと一ミリも思っていなかった。父親は私の間違えた考えを正そうと、優しく話してくれた。しかし、その言葉も真剣に聞かず、ずっと俯いていた。その時、いつもは穏やかな父親が私を生まれて初めて平手打ちした。とても痛かった。頬がチリチリと熱くなり、目尻から一粒の涙が流れた。この時、母親の目からもボロボロと涙がこぼれていた。私は黙って両親を睨みつけ、自分の部屋に籠もって声にならない感情を抑え、悔し涙を流した。なかなか冷静になることはできず、二日間も両親とは口を聞かなかった。

二日目の夜、私がベッドに入り、部屋の明かりを消そうとした時、一階から両親の声が微かに聞こえた。内容はハッキリとは聞き取れなかったが、私のことで話し合っているのは分かった。その夜も、次の日も、以前の喧嘩について、もう一度冷静に考えた。私はいくつもの自分の非に気がついた。本当に自分は幼かったんだ。そう思うと、自分自身がとても恥ずかしくなった。以前までのイラ立ちは一気に不安へと塗り変えられた。親と一緒にいるのがグサイ。そんな考えを持っていた自分が、とても情けなく、それこそが一番グサイ。それにやっとなしく、いざ母親の姿を目の前にすると、勇気が出なかった。目が合った。急いで目を逸らしてしまった。しか



し、その瞬間、私は母親の温もりに包まれていた。肩が
涙で濡れた。母親が

「ごめんね。こんな母親で。」

それだけを繰り返していた。私はその時、自分が母親を
こんなにも追い詰めてしまっていたことと、これが何も
悪くない母親が出した答えなんだと考えると、涙が止ま
らなくなった。母親がごめんと繰り返す姿に心が痛くな
った。

「もう謝まらないで、ごめんなさい。」

そう言葉にした瞬間、母親はその場に崩れ落ちた。私は
強く強く母親の手を両手で包み込んだ。何も分かってい
なかったのは自分だった。久しぶりに母親の温もりに触
れることができた瞬間だった。

この出来事はとても心動かされた体験だった。母親の
温もりを知り、互いに理解し、ぶつかり合い、その経験
を通して、学ぶことが大切だと分かった。反抗期や思春
期だって感情が無いわけではない。そんな状況だからこ
そ、人のことを考えることが一番大事だと気づいた。